

エビ入りのエビ無し
チャーハン

カンキツf

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

過去にPixivで公開したものです。

目次

エビ入りのエビ無しチャーハン | 1

エビ入りのエビ無しチャーハン

「長良さくん。ちよつと相談したいことがあるんですけど」

「筋肉をつけると脂肪って付きづらくて」

「いやそういうのじゃなくて」

「カロリーの効率的な消費方法はね」

「いやそういうのでもなくて」

「……いきなり糖質制限は阿賀野にはキツいんじゃないかな？」

「怒りますよ」

「ごめんごめん。新しく着任した子のことでしょう？」

新しく着任した潜水艦のスキャンプ。阿賀野は昔彼女の雷撃を受けて損傷し、航行不能になっていたところを長良さんに曳舟して貰ったことがある。

「……はい。どうやって接すれば良いのかわかって……」

「それはね阿賀野……長良も聞きたい」

「もういいです」

「待って待って！ 本当なんだって！ 長良も全然上手くないかなくてさ！ この前な

んかさ——」

『やあアトランタ！ ご飯食べてる!? 野菜もちやんと食べなきゃ駄目だよ!』

『触るな』

『日光にも当たんなきゃ駄目だよ! 自律神経を整えてくれるからね!』

『触るな』

『なんなら長良がやってあげる!?! ご飯の栄養から日々の生活の一分一秒まで管理で

きるよー!』

『触るな』

「——みたいな感じで取り付く島も無くてどうしたらいいのか……」

「長良さん……」

相談しようとした相手から逆に相談を持ちかけられ、いきなり出鼻を挫かれる。

「まあでもそういうことなら長良もちやんと考えるから! 安心して阿賀野!」

「どうも……」

長良さんは快く引き受けてくれたけどもう既に阿賀野の中には不安しかなかった。

「こういうのはあまり色々考えて尻込みしてしまうのがないよ! 勢いのままガーツ

と行くのが一番!」

「勢いのままって……例えばどんなのですか?」

「例えばね——」

『こんにちはー！ スキャンプちゃん！ 昔あなたに魚雷を撃たれた阿賀野だよ！昔！あなたに！！ 魚雷を撃たれた！！ 阿賀野だよ！！ 覚えてる？ 覚えてない！！でも大丈夫！ 阿賀野もう” 気にして” ないから！！ もう” 気にして” ないから！！ これから一緒に頑張つていこー！！！！』

「——というのは良くない例なんだけど……」

「でしようね」

いきなりとんでもない例を言い出してきた長良さんを冷ややかな目で見つめる。長良さん本当に真面目に考える気あるの？

「うくん……長良だけじゃ厳しいかも……。もう1人助っ人呼んでくる！」

「えっ！ もう!? 早くないですか!？」

「阿賀野はここで待つてて！」

「ちよっ！ 長良さん待つて！ 行っちゃった……」

普段の長良さんからは考えられないようなスピードでお手上げ宣言をすると半ば自己完結したように話しを進めていき、阿賀野の言葉など聞きもせず長良さんは助っ人を呼びに行つてしまった。

「え……」

長良さんの勢いに着いていけず一人残された阿賀野はその場に立ち尽くしていた。

「なるほど……阿賀野さんのう……」

「そーなんだよ浦風。一緒に考えてくれる?」

長良さんが呼びにいった助っ人とは浦風ちゃんのことだった。浦風ちゃんも阿賀野が雷撃を受けたときと同じときにスキャンプに狙われていたし、その後長良さんと一緒になって阿賀野を曳舟してくれたこともある。事の顛末を知っているし、確かに相談相手として良いのかも。

「まあこがいなのは変に考えるよりある程度勢いに任せた方が上手くいく思うよ」
「なるほど……」

(長良さんと似たようなこと言ってる……)

「……具体的にどんな感じでいけばいいかな?」

「うーん……そうじゃなく……例えば——」

『こんにちはー! スキャンプちゃん! 昔あなたに魚雷を撃たれた阿賀野だよ!』

昔!あなたに!! 魚雷を撃たれた!!! 阿賀野だよ!!! 覚えてる? 覚えてな——』

「それさつき長良さんから聞いた!!」

「あれ、そうなんか? 偶然じゃのー」

「……本当に? 2人とも打ち合わせとかしてるんじゃない?」

「していないしてない。グーゼングーゼン」

「そうじゃよ阿賀野さん。長良さんの言う通りじゃけえ」

「……………」

笑いながら二人は違う違うと両手を振る。いまいち真剣味の感じられない二人に少しだけ不信任感を覚える。

「だけど意外じゃよ。阿賀野さんそがいなの割り切つとる方じゃと思うとつたんじゃけど」

「確かに。長良もそう思ってた」

「そりあ、あれのせいでエビ嫌いになるくらいには…………」

「…………何でエビ?」

長良さんが疑問を口にする。

「だつてほら…………スキャンプってエビ…………」

「…………エビはシュリンプでしょ?」

「スキャンプって名前のエビがあるんですよ」

「…………阿賀野さんそりゃスキャン『プ』じゃのうてスキャン『ピ』じゃないんか?」
今度は浦風ちゃんがボソツと疑問を口にする。

「…………え? スキャンピ? スキャンプじゃなくて…………?」

「確かそうじゃと思うけど……」

「へ、へ……」

スキャンプじゃなくてスキャンピなんだ。違うんだ。そっかそうなんだ……そっか……」

「……阿賀野さんひよつととしてずつと勘違いしとったんか？」

「……いや違うんだよ浦風ちゃん。勘違いじゃないんだよ！ やっぱり一文字違いで語感が似てるからさー！ それでどーしても！ どーしてもね！」

「……うーん」

「……長良さんは分かってくれますよね!？」

「うん分かるよ。これで阿賀野のエビ入りチャーハンが食べられるようになるかも……つてことだよね？」

「話聞いてました!？」

とても話を聞いていたとは思えない長良さんのよく分からない返答に声を上げる。

「……長良さんは阿賀野さんのチャーハンよく食べるんけえ？」

「そうだよ。長良さんがたまに食べたいって言うから阿賀野が作ってあげてるの」

「阿賀野はいつも長良におはぎ作ってくれてねだつてくるから。たまにはそっち

もつてことで」

「なるほど……つまり長良さんと阿賀野さんはお互いの顔面におはぎとチャーハンを叩きつけ合う関係……つちゅーことやね？」

「浦風ちゃん!? 急にどうしたの!?!」

浦風ちゃんが柄にもなく唐突に変なことを言い出す。

「ほんとだよ浦風。どっから出たのその発想……。ま、合ってるんだけどね」

「いや全然合ってますよ!? 何言ってるんですか長良さん!?!」

「ジューダンジューダン」

「もー……」

「ははは!」

あーびつくりした。浦風ちゃんがいきなり変なこと言い出したことも長良さんがそれを肯定したこともびつくりだよ。さつきから二人ともなんなの？

「……そういえばうちら何の話をしとったんじゃつけ？」

「……………」

「……………」

浦風ちゃんの一言に阿賀野達の間には微妙な空気が流れる。

「もー! 2人とも真面目にやって下さいよ!」

「……でも長良達がアドバイスすることって特に無いし……」

「ええ!? 何ですか!？」

「長良はさ……こういうのはなるべく本人の言葉で伝えるのが良いと思うんだよね」

「そりあ……そっちの方が良いんでしようけど……」

「もちろんそれは理想だけだね。みんながみんな自分なりに伝えられる言葉を持つてる訳じゃないからね」

「そうですよ! だから……」

「阿賀野はもうあるんじゃない? 自分の中でそういう言葉がさ」

「……何でそう思ったんですか?」

「勘」

「勘……」

「後長良がふざけててもそこまで困った感じじゃなかったから」

「ツ! 長良さん……!」

長良さんの一言にハツとして目を見開く。

「ふざけてる自覚あったんですね……。てつきり素でやってたのかと……」

「あつたよ……」

少しだけ間を置いた後長良さんが話を続ける。

「……スキャンプが来るって聞いてから阿賀野ずっとそわそわしてたし、実際に着任した後も何か話したそうにしてたからね」

「ああ……そういう風に見えてたんですね……」

「違った？」

「いえ、合ってます」

「なら良いや。まあ阿賀野がしばらくそんな感じだったから、そのうちスキャンプのことで長良の方に何かしら言ってくるんじゃないかなって思ってたんだ」

「そうなんですか……」

「だから浦風と口裏合わせてちよつとね……。確認したかったんだ」

「……………」

確かに阿賀野はスキャンプが来るって聞いてたときも実際に着任したときも長良さんが言う通りの行動をしてて、それを隠したりもしてなかったから、事情を知ってる長良さんが何かあると思ってもおかしくはないんだけど

(なんだ。もうそんなところまで見抜かれてたんだ)

長良さん。たまに妙に聡いというか、鋭いところあるんだよね……。けど長良さん妹が5人もいる上に旗艦経験も多いしそういうところがあってもあんまり不思議じゃないのかも？ いや、今はそんなことより――。

「やっぱり打ち合わせしてたんじゃないですか!!」

「ごめくん……」

「すまん阿賀野さん……」

阿賀野の糾弾に長良さんと浦風ちゃんが申し訳なさそうに手を合わせる。だからといってあれはふざけ過ぎてると思う。こっちは真面目な相談してるのに。だけど……。

「まあ……でも……長良さんの言うことも一理あると思います……。自分の奴でいつてみます……」

長良さんが睨んだ通り、阿賀野は二人がふざけていても不思議とあんまり嫌な気分ではなかった。長良さんに相談したのはまるで思いつかない答えを一緒に探して貰おうとするためにしたのではない。むしろ阿賀野の中に既に答えはあって、その確認みたいな意味合いのほうが強かったのかもしれないと今になって思う。

しかしもうここまで来ると相談しようとしてから全てのことが長良さんの手のひらの上のように感じてしまう。

「長良さんどこから用意してたんですか?」

「割と最初の方からかな」

「じゃあアトラクタちゃんとの話は作り話なんですか?」

「いやそれは本当。用意じゃないよ」

「それは本当なんですか……」

「あと阿賀野がスキャン『プ』とスキャン『ピ』を間違えてたことも……」

「それはいいです!!」

長良さんの話を強引に遮ると部屋の扉に向かっていきドアノブに手をかける。

「もう行くの?」

「やるって決めた以上ダラダラしててもしょうがないですから」

「……そうだね」

「行ってきます。ありがとうございます。浦風ちゃんもありがとうございます」

「頑張つて〜」

「上手く行くとええのお」

そう言つて小さく手を振る長良さんと浦風ちゃんに見送られて、阿賀野は部屋を出た。

「スキャンプ……さん……」

阿賀野が声を掛け呼び止めると、くるりとスキャンプが振り返る。

「……どうした? あたいになんか用か?」

声の主が阿賀野だと言うことが分かるとスキャンプの表情に僅かに陰しさが浮かぶ。

その表情をみて阿賀野の顔が少しだけ強張る。

「……………」

過去で敵同士だったことなんてスパッと割り切って、今は仲良くやつてる人達は結構多い。いや、多分そっちの方が多くらいだと思う。でも阿賀野みたいに『まだ』そうじゃない人も当然いる。目の前のスキキャンプだってそうだ。だからこそ言う必要がある。

「…………阿賀野と一緒にエビ獲りにいかない!？」

意を決してそう伝えた。

「…………は？」

「は？」

「はあ？」

すると目の前のスキキャンプといつの間にか後ろにいた長良さんと浦風ちゃんの声が重なった。

「…………え？」

その後、スキキャンプと別れて心配だからと阿賀野とスキキャンプの会話を隠れて見ていたらしい長良さんと浦風ちゃんの二人と軽巡察の廊下を歩いている。

「まーでも良かったね。阿賀野のあれであんなに笑つてゐることは悪い人じゃないよ、間違いない」

「そうじゃね〜」

「長良さん……」

浦風ちゃんと談笑している長良さんに声を掛けると二人が振り返る。

「別の奴の方が良かったんじゃ……」

「何言つてんの！ 大成功じゃん！ 確かに一時はどうなるかと思つたけどたつた一言であんなに打ち解けるの凄いよ！ やるじゃん阿賀野！」

「うちも長良さんと同意見じゃよ。正直感心したくらいじゃけえ。流石じゃよ阿賀野さん」

「あんまり嬉しくない……」

阿賀野としてはふざけたつもりは一切無かつただけど二人からしふざけた一言の一発でわだかまりを解いたように見えてるんだかろうな。そうじゃないんだけどね。

でも自分が想像していた反応と過程とは違ふとはいえ一応望む結果が得られたことは間違い無くよかった。よかったはずだけど……。心の底から手放して喜ぶことは出来ない複雑な気分だった。

（ま、いつか……）

けれど言い出せずにやきもきしてたときよりは良い気分なのは確かだった。